

『萬葉集古義』の故地研究

毛利 正守

私は今回、鹿持雅澄の『萬葉集古義』の故地研究という題でお話しをすることになるが、江戸時代の大変優れた孤高の国学者であった鹿持雅澄が萬葉集の中の地名をどのように捉えていたかというあたり、雅澄の地名研究について考証し、考えを述べてみたい。

これから資料に沿って進めていくが、その前にまず、鹿持雅澄の略歴や雅澄以前のこの分野の研究史に触れることにしたい。

鹿持雅澄は国学四大人と呼ばれる、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤につながる国学者であり、歌人でもあった。雅澄は幕末の土佐国（高知県）の福井村に寛政三年、西暦一七九一年に生まれ、安政五年の一八五八年、六十八歳で亡くなっている。生家は飛鳥井氏の支流をなし、新古今集の撰者雅経、新続古今集の撰者雅世を祖先にもつ名家であったが、雅澄が誕生した頃にはすでに家は没落していた。

雅澄が十五歳の時、母を亡くし、土佐藩士として仕えるかたわら、十七歳頃からは朱子学を学びはじめ、やがて賀茂真淵の弟子筋にあたる宮地仲枝の門弟となり、国学の手ほどきを受けることとなったが、古典の研究に関してはほとんど独学であったと言える。また、歌人としては土佐の地元の歌人達と交流を通して、萬葉調の長歌や短歌を詠作している。天保七年に妻菊子を亡くし、多くの追慕の歌を詠んでいる。その後も一家の長として男手一つで三人の子供と老父の世話や家の雑事に忙殺されながらも、研究や著述を続けて、天保十五年には藩主より、長年の功績によって金を賜っている。しかし、生涯、自身の病苦や家庭の貧苦に辛酸をなめた人生であったと言えよう。

安政初年頃に、後に独創的な注釈からなる土佐萬葉集の集大成ともなった大著『萬葉集古義』を脱稿する。生前、六次にわたって推敲を重ねて完成された雅澄渾身の大作であり、後世・今日まで名著の誉れ高い注釈書ではあるが、雅澄の生前は人目に触れることはなかった。雅澄の死後、孫が祖父・雅澄の遺稿『萬葉集古義』の存在することを他言したことが端緒となり、明治天皇の叡覧するところとなって、明治十二年（1879）に宮内省から公刊されることになった。そして明治二十六年、全巻一四一巻にも及ぶ大著『萬葉集古義』の完成をみたのである。

この大作の最後の方に『萬葉集名處考』、また『萬葉集名處國分』という地名の研究を盛り込んでいる。そのことを話す前に、簡単に江戸時代の鹿持雅澄以前、平安から中世にかけては地名というものがどのように考えられ、研究されてきたかをまずは見ておくことにしたい。地名を考える上で、中古から中世にかけては歌枕ということばが散見され、その研究書も多い。歌枕については発生的には、和歌に読み込まれる歌ことばを指し、少し時代が下がると、その歌ことばのうちの地名のみを指して使用されるようになる。もともと広義に用いられていたものが、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて、狭義に地名として用いられ、今日でも狭義に使用されるのが一般となっている。古く歌枕は、たとえば、ユグラヤマという地名もあれば、サホビメ、アサギリ、シロタヘ等々、いろんな歌ことばがあったが、特に地名のみを指していく経緯をたどったわけである。歌枕という言葉は早く平安の源氏物語成立頃にも出てきている。

よろづの草子歌枕、よく案内知り見つくして、その中の言葉を取り出づるに、詠みつ

きたる筋こそ、強うは変らざるべけれ（源氏物語、玉鬘卷）

これは、色々な草子や歌枕の書物をよく学び、中身を知り尽くしてその中のことばを取り出してみても、読み癖はたいして変わらないでしょうといったほどの意である。

次に枕草子の類聚段中を紹介するが、ここでは歌枕ということばは出ていないが、後に歌枕として色々と取り上げられる形で記されている。一例を挙げると、「山は 小倉山。鹿背山。三笠山。このくれ山。いりたちの山。わすれずの山。末の松山。かたさき山こそ、いかならむとをかしけれ。（略）あさくら山、よそに見るぞをかしき。（略）峰は ゆづるはの嶺。あみだの峰。いや高の峰。原は みかの原。あしたの原。その原。」のごとくである。たとえば、山はとして、小倉山、鹿背山、三笠山云々と挙げ、続けて「かたさき山こそ、いかならむとをかしけれ」とする。かたさきとは、相手に遠慮して身を引く、そういう意の名前の山であるので、いったいどのように脇へ寄るのであろうかと、清少納言は「をかしけれ」といって興味を示す。続いて朝倉山について「よそに見るぞをかしき」つまり、よそに見るのが趣があると記している。しかし、これだけでは分かり難いが、当時、歌の中に朝倉山が次のように詠まれている。

昔見し 人をぞわれは よそに見じ 朝倉山の 雲居はるかに（未木抄 雑二）

このように歌枕として読み込んである歌を知らなくては、清少納言のこの文章が味わえない。「よそに見るぞをかしき」は、それを踏まえているということである。

次に能因歌枕、五代集歌枕、和歌童蒙抄を挙げる。

・能因歌枕（廣本）

ふるの社	かづらきの山	とほちの里	はつせ川	みゝなし山	さるさはの池
みかさ山	すがたの池	たつた川	よし野川	みなれ川	いはせの森
よしの山	いもせ川	かほの池	ますだの池	かたをかの	水のさと
あすか川	しきしま	かすが野	さほ川	さほやま	すがたの
たつた山	神なみ山	をはつせ山	みむろのきし	いこま山	鶯のうら
おとほの瀧	まつち山	高まの山	くらはし山	松ばやま	かはら山
朝の原	とみのをがは	ますだ川	かねつの山	本取山	いかるがの宮

ありす川（略）

關をよまば、あふさかの關、白河の關、衣のせき、ふはのせきなどを讀べし。

河をよまば、よしの川、たつた川、おほ井川などをよむべし。

橋をよまば、はにはのはし、はまなのはし、さのゝ舟はしとも讀べし。

山をよまば、吉野山、あさくら山、みかさ山、たつたやまなどよむべし。

・五代集歌枕

(一) 山 (二) 嶺 (三) 岳 (四) 隈 (五) 杣 (六) 林 (七) 坂 (八) 野 (九) 澤
(十) 田 (十一) 原 (十二) 牧 (十三) 窟 (十四) 杜 (十五) 社 (十六) 寺

(一) 山

をぐらやま 山城

萬八 夕されば小倉の山になく鹿はこよひはなかずいねにけらしも

岡本天皇

古五 ゆふづく夜をぐらの山に鳴鹿の声のうちにや秋はくるらん

貫之

撰八 春ちかくふる白雪はをぐら山みねこそ花のさかり成けれ 読人不知
 同十七 大井河うかべる舟のかゞり火に小倉の山もなのみなりけり 業平
 拾二 あやしくもしかの立どのみえぬかな小倉の山にわれやきぬらん 兼盛
 同十七 小倉山みね立ならし鳴鹿のへにけん秋をしる人ぞなき 貫之

たかまと山 高円山

(萬六) ますらをのたかまと山にせめたれば里におりけるむさゝびぞこれ 坂上郎女
 (同八) 春雨のしきしきふるにたかまとの山のさくらはいかゞあるらん 河辺東人
 (同) 春日野に時雨ふるみゆあすよりは紅葉かゞゝんたかまとのやま 藤原八東

みなぶち山

同九 みけむかふみなぶち山のいはほにはちるなみたれかけづりのこせる 人丸
 同(十) ますかゞみみなぶち山はけふもかも白露おきてもみぢちるらん

まつち山 大和国

萬一 あさけつぐき人ともしもまつち山ゆきくと見えんき人ともしも 淡海
 同九 あさもよいきへゆくきみがまつち山こゆらん今日ぞあめなふりそね
 同十二 つるばみのきぬときあらひまつち山もとつ人にはなほしかずけり
 同 いであがこまはやくゆきこせまつち山待らんいもをゆきてはやみん

・和歌童蒙抄

地部

土 国 山 嶺 嵩 谷 柚 坂 林 社 野 原 田 沢 関 道
 石 水 氷 波 河 柵 瀧 池 沼 潮 海 江 浦 嶋 浜 附 塩 竈
 洲 潟 湊 磯 崎 岸

地儀部

土

おほつちもとればつくてふ世の中に尽せぬものは恋にぞ有ける
 萬葉十一にあり。おほつちもとは大地といふ也。よく広くて極なきによりて尽せぬ事にたとへたり。

白妙のみつのはにふの色に出ていはずてのみぞ我恋らくは

同にあり。はにふとは黄土とかけり。

国

豊国のかゞみの山にいはとたてかくれにけらしまでどきまさず
 萬葉第三に有。とよ国とはやまと嶋ねの名歟。日本紀に豊葦原のみづほの国といへり。又豊前豊後の国をいふ歟。

いなといはん事をもしひじ敷嶋のやまとの国の人やたへたる

磯城嶋は大和の名也。磯城郡。

(略)

杜

ものゝふのいはせの森のほとゝぎす今もなかなん山のとかげに
 萬第八にあり。岩瀬の森は大和にあり。又津国やしなのにもあり。山のとかげとは常影と書り。又跡陰とかきて、ふもとゝも、又とかげ共読れば、麓の心にや。

いかにせむうさかの森に身をすれば君がしもとの数ならぬ身を

うさかの森は越中の国に在。其神の祭の日、禰宜ののと申時に、年の中に女の男したる、男の女したる数を申さする也。さてすはえを持って、女のしりをうつ。さればしりうちの祭りとなん云伝へたる。又みをすればとは、神にものをまるらするをいふ。進食と書り。委見日本紀第七。

上の例はどれも平安朝の歌学書である。『能因歌枕』は和歌の詠作の手引き、歌の便覧のごときのものであり、歌語を挙げて用法を略説している。それぞれの国を挙げているうち、ここでは大和国をみることにするが、いかにも目次のように社、山、里、川等々を挙げ、その後で説明するといった形をとる。つまり能因歌枕は、「關をよまば、あふさかの關、白河の關、衣の關、ふはのせきなどを讀べし」「河をよまば、よしの川、たつた川、おほ井川などをよむべし」といった体裁をとるのである。おなじく『五代集歌枕』、これも平安時代後期（1126年）成立の歌学書であり、萬葉集より後拾遺集に至る五つの歌集から歌枕の作例となるものを抄出する。はじめに目次があり、山の部のをぐらやまでは、これは山城にあるということで「をぐらやま 山城」と記す。最初に萬葉集卷八、一五一一番の歌である「夕されば小倉の山になく鹿はこよひはなかずいねにけらしも」を例歌として挙げ、舒明天皇（岡本天皇）の作とする。それに続いて古今集も挙げて小倉山というのはこれこれの歌があると列挙する。また、たかまと山についても萬葉集を挙げて、萬葉集の中にこのように多く詠まれていることを示す。「ますらをのたかまと山にせめたれば里におりけるむさゝびぞこれ」（卷六、一〇二八）と坂上女郎の歌を挙げ、そののち順次一四四〇番など萬葉集歌を列記するのであるが、平安期の歌学書であるので、萬葉集の萬葉仮名や訓字ばかりで記されているものを正確に記し得ていないものもいくつかある。この一四四〇番「春雨のしきしき ふるにたかまとの山のさくらはいかゝあるらん」も萬葉集の原文では「しきしき」は「敷布」、結句の「いかゝあるらん」も「何如有良武」である。あるいは大和国にあるまつち山について、萬葉集の卷一の五五番を挙げる。初句の「あさけつぐ」も、萬葉集での、調首淡海の「あさもよし紀伊人羨しもまつち山行き来と見らむ紀伊人羨しも」と異なっている。次に挙げる『和歌童蒙抄』、これは十卷から成る藤原範兼の著であり、卷一～九は、分類体歌語辞典ともいうべき内容で、詠法・歌語・背景・故実を解説し、卷十は歌学一般について記す。これも前出の二作と同じように平安朝の歌学書であるが、例歌を挙げたあとに説明を加えるといった点に特徴をもつ。地儀部の「土」に「おほつちもとればつくてふ世の中に尽せぬものは恋にぞ有りける」を挙げ、次に、この歌は萬葉集の卷十一にあり、おおつちとは大地なり、これは広くて極みない、尽きないことにたとえて歌うのだと説明を加えるがごときである。平安朝などの歌枕の書物はおよそ以上のごとくであるが、江戸時代に入ると、『萬葉代匠記』という萬葉集の注釈書を著した偉大な契沖が地名の研究を精力的になした。

・おほはら（大原）

萬葉代匠記

103 吾里爾 大雪落有 大原乃 古爾之郷爾 落卷者後

欄吾里ニ大雪フレリ大原ノフリニシ里ニフラマクハノチ

大雪ハ左伝日。平地尺為大雪。カ、レハ寒温等分ノ所ニ一尺ハカリ積ルヲ大雪ト云ナリ。大原ハ第四第十一ニモヨメリ。中ニモ第十一ニ、大原ノ古ニシ里ニ妹ヲ置テト、今ノツ、キト同シクヨメリ。和州〈高市郡〉ナリ。続日本紀曰。天平神護元年十月己未朔辛未、行幸紀伊国（一）云々。是日到大和国高市小治田宮。壬申、車駕巡歴大原長谷、臨明日香川而還。〈或者ノ云。多武岑記云。藤原宮大原也。今見ルニ後飛鳥岡本宮ノ旧跡ノ東北三四町ハカリ云々。

カ、レハ）（此所サキニ都ノ有シ辺ナトニテヤ）古ニシ里トハ読セタマヒケ〈ルナルヘシ〉（ム）
御製ノ心ハ、大雪ノ珍ラシキヲ戯ニホコラセ給ヒテ、ソコハ古里ナレハ、雪モ此許ニ降ハテ、後
コソフラ〈メ〉（ヌ）哀カ、ル折ヲ見セハヤト、都ヲ羨マシメタマフ意ナリ

初わかさとにおほゆきふれり大原のふりにしさとにふらまくはのち

隱公九年左伝曰。平地尺為大雪。大原」は和州なり。続日本紀曰。天平神護元年十月己未朔辛未、
行幸紀伊国。○是日到大和国高市小治田宮。壬申、車駕巡歴大原長谷、臨明日香川而還とあれば、
小治田宮より長谷のあひたに有と見えたり。雪のふかうおもしろくふれるを、たはふれにほこら
せたまひて、そこはふるさとなれば、かゝるおもしろき雪も、かくこゝもとにふりはてゝのちこ
そふらめ、あはれみせはやとうら山しめ」たまふなり

志貴皇子御歌一首

513 大原之 此市柴乃 何時庶跡 吾念妹爾 今夜相有香裳

初志貴皇子御歌一首

大原之此市柴乃——

市柴六帖、続古今、共イ
テシハ。別校本亦同

大原ハ大和ナリ。第二ニ云カ如シ。此ト（ノタマヘル）ハ、按スルニ藤原、大原同所ト云ヘハ、
藤原ニ皇居ヲトタマヒシ時、此皇子モ彼処ニオハスヘケレハ、サテ此トハノタマフナリ。市柴ハ、
第」八第十一ニハ五柴トカケル故ニ、今モイツシハト点セルカ。袖中抄云。イツシハイチシハ同
事ナリ〈ト云ヘリ〉（又云、イチヒ柴ト云歟）平家物語、大原御幸ニ此歌ヲ引タルハ、大原ヲ北
山ノ大原ト心得テ、市柴ヲハ市ニモテ出ル柴ト思ヘルニヤ。第十二ニ、御獵スル狩場ノ小野ノ樅
柴之トアルヲ、今ノ本ニハナラシハノト〈点セ〉（ア）レト、顯昭ハ〈先〉カシハキノト引テ或
本ニ樅柴之トカケリ。イチシハ、イチヒシハト云歟。常ニハ樅柴ノトモ云ヘリトアレハ、樅柴
ヲイチシハト点セリト見エタリ。六帖ニ、今ノ歌ヲ草部ニイチシノ歌トセルハ、イチシノ交リタ
ル芝ト心得タルカ。僻事ナルヘシ。此市柴ハ、イツシカトノタマハム為ニ所ニアヒタル物ヲ」取
出タマヘリ。イツシカハ、シハ助語ニテ、イツカ逢ハムト思召ツル人ニ嬉シク今宵アヒ給フトナ
リ。庶ハ鹿ニ改ムヘシ

初大原の此いつしはのいつしかとわかおもふいもにこよひあへるかも

続古今集には、大原や此いちしは、こよひあひぬると載られたり。大原は、第二卷天武天皇の御
歌にもありて注せり。山しろにあらす。やまとなり。管見抄に、大きな原あり。名所にはあら
す。たとへは大野らとよめるかことしといへるは、いまた続日本紀を考さりけるなり。市柴は、
第十一にも、道のへのいつしは原のいつもいつも人のゆるさんことをしまたんという歌に、五柴
原とかきたれば、今も市をいつとよむへし。市に出てうる柴のことなといふ、さにはあらす。続
古今集にも、しか心得て載られ、平家物語には、所をも八瀬大原の大原とさへ心得たりと見え
たり。又管見抄に、いつくしき心なり。柴は焼柴にはあらす。芝柴よみひとつなれば、いつくし
芝原といふことなりといへり。いかゝ侍らん。今案なら柴、くり柴、など申ことく、もしいちひ
の木のちひさきを、かりはやすなともいふ歟。みかりするかりはのをのゝなら柴のといふ歌に、
樅柴とかけり。樅の字をこそならとはよめ。されとも、なればまさらとつゝけたれば、なら柴
ならて、いちしはといひてはつゝかす。もしならとかしはとのかよふことく、いちひとならとも
一類にて、かよはしかける歟。通する物ならば、なら柴のことく、いちしはともいふへくや。鹿
誤作ル庶

2587 大原 古郷 妹置 吾稻金津 夢所見乞

〔大〕大原古郷

古郷豊齋本、
吉作故

第二ニ天武天皇ノ御歌ニモ大原ノ古ニシ里トヨマセ給ヘリ。ニハ助語ナリ

〔初〕大原のふりにし里 大和なり。第二に天武天皇の御歌にも、大原のふりにし里とよませたまへり。

委そこに注せり。第四にも見えたり。頼政卿の

山しろのみつものゝ里に妹を置いていくたひよとの舟よはふらん

これは今の歌をおほえてやよまれ待けむ

『萬葉代匠記』中のおほはら（大原）を例として挙げると、契沖は、萬葉集中に幾つか出る大原のそれぞれの歌で説明を加える。まず、一〇三番「吾里爾 大雪落有 大原乃 吉爾之郷爾 落卷者後」を挙げ、そのあと、傍線部にあるように、この大原については他にも出るとして、「卷四卷十一にもよめり」とし、中でも「卷十一に、大原の古にし里に妹を置てと、今の続きと同じく詠めり」と述べ、高市郡にあるとする。また、続日本紀を引いて、ここにも大原の記述があるとして考証を加える。これは精選本であるが、初稿本でも大原を注釈する。また、次の五一三番においても、傍線部にあるように、大原は大和なり。卷二の所で云うが如しと解説し、初稿本では続古今集を挙げてこれを考証する。また二五八七番でも大原の例を挙げて説明を加えるといったごとく、大原が出る各々の歌でとり挙げる。

一方、萬葉集の注釈である『代匠記』とは別に、契沖はいくつかの地名研究書をあらわしている。まず、『勝地吐懐編』であるが、一卷本と三巻本とがあり、一卷本は契沖以外の者（里村昌琢）が考証したものを修正し、増補するかたちで記したものであり、次のごときかたちをとる。

勝地吐懐編

大原

山城 愛宕郡

大原や此いちしはのいつしかと我思ふ妹にこよひ相ぬる

大原のふりにし里に妹を置て我いねかねつ夢に見えつゝ

右二首、初は万葉第四、後は同しき第十一に出たり。此大原は、大和国高市郡なり。又第二に、天武天皇藤原夫人に賜ふ御歌云、我里に大雪ふれり大原のふりにしさとにふらまくはのち、第八云、藤原夫人宇日大原大刀自。即。新田部皇子之母也。続日本紀云、天平神護元年十月辛未、行幸紀伊国、壬申車駕巡歴 大原長谷、臨明日香川而還。藤原と大原と、おほよそ同所といへり

〔一卷本〕

ここでも『勝地吐懐編』のうち、大原の箇所をとり挙げたが、傍線部のように、大原は大和の国の高市郡であると注す。また、あるいは続日本紀を挙げて、藤原と大原はおおよそ同所であるとも解説する。それに対して、三巻本は他者の考証したものを踏まえるのではなくて契沖自らが記したものである。その場合には次のごとく、大原を歌う和歌を少なからずとり挙げ、しかしそれに対する説明・解説をほどこすというかたちはとっていない。

大原

かしらおろして後、大原にこもりゐて侍けるに、閑中歳暮

といへる心を、聖人ともよみ侍けるに、よみ侍ける 民部卿親範
 都にておくりむかふといそしきを知らてや年のけふはくるらん
 大原来迎院にて 縁忍上人
 山のはに影かたふきて悲しきは空しく過し月日なりけり
 (大原にすみ侍りて、雪のふる日故郷へ申つかはしける 藤原貞憲朝臣
 ぶり捨て入にし山の雪みても跡はいかにと思ひこそやれ)
 <藤原貞憲朝臣、出家の後高野にこもり侍ける時、大原の坊
 にまかれりけるに、あはれなる事を障子にかきて侍けるを
 見て、そのかたはしに書つけ侍ける 法橋顕昭
 思ひける心のみゆる玉つさはぬしにかたらふ心ちこそすれ>
 大原にまかりて、草庵の所なとしめ置て後、寂円上人に申
 つかはしける 常磐井入道前太政大臣
 うれしくそまたみぬ山の奥もみし世のうき時の宿もとむとて」
 建礼門院、大原におはしましける比、まゐりたるに、夢の
 心ちのみして侍ければ、思ひつゝけ侍ける 右京大夫
 今や夢昔や夢とたとられていかにおもへとうつゝとそなき
 大原にすみ侍て、雪のふる日、故郷へ申つかはしける 従三位氏久
 ぶり捨て入にし山の雪みても跡はいかにと思ひこそやれ (三卷本)

同じく契沖の地名研究書である『類字名所補翼鈔』でも大原について、その歌を列挙する。そのあ
 り方は、ある意味で歌枕の書に近いものがあると言ってよい。つまり『能因歌枕』や『五代集歌枕』
 のごとき体裁である。

類字名所補翼鈔

大原

山城 愛宕郡

大原やまきの炭かま冬くれはいとゝなけきの数やつもらん
 すみかまの煙は空にかよへとも大原山の月そさやけき
 大原やすみのかしらのなはゆるせこのめになみたうかふといふなり
 <大原やすみやきしたる人をして小野の山なるなけきこらせし>
 <やくとのみなけきをこりて炭かまの煙たえせぬ大原のさと>

契沖は注釈書である『萬葉集代匠記』では、たとえば「かむなび」(神名火 神奈備) について次の
 ごとく詳しく説明する。

・かむなび (神名火 神奈備)

萬葉代匠記

1435 河津鳴 甘南備河爾 陰所見 今哉開良武 山振乃花

〔河津鳴甘南備河爾一〕

今哉皇本、イマカ、哉作香。

六帖ニハ発句ヲ、チハヤフルトテ、山吹ノ歌トセリ。甘南備河ハ大和国高市郡ニアリ

詠—鳴鹿—歌一首并短歌

1761 三諸之 神辺山爾 立向 三垣乃山爾 秋芽子之 妻卷六跡 朝月夜 明卷鳶視 足日
木乃 山響令動 喚立鳴毛

釋詠鳴鹿歌一首并短歌

三諸之神辺山爾一

〈喚立鳴毛別校本云、ヨ
ヒタテナクモ〉

初ノ二句、仙覺云。此句古点ニハミムロナルカミノヘヤマト点ス。ミムロノカミノヘ山イマタ聞
モ及ハス。オホツカナン。仍テ和シ換テ云。ミムロノカミナヒヤマト云ヘシ。部ノ字ベトヨメト
モ、所ニ随ヒテビトヨメリ。備ノ字ビナレトモ、所ニ随ヒテヘトヨム。ヒトヘト通フコト常ノ習
ナリ。尋云。神辺ハカミノヘナリ。」カミヘヲカミヒトハ云トモ、文字ニ見エサルナヲ読カクシ
テ、カミナヒトナセルヲハ如何意得ヘキヤ。答云。コレ傍例ニ依テ読ナリ。假令海上、水上、田
上山、此皆ノヲナトヨヘリ云々。以上略抄義明ナリ。第六ニ倭部越鴈、第十二山跡部越鴈トカケ
ルハ、共ニ山飛越ナリ。渡辺ハワタノヘナルヲワタナヘトモ云ヘハ、彼此ヲ合セテ仙覺ノ点ニ依
ルヘシ。延喜式ニ載タル出雲国造神賀詞ノ中ニ、大御和ノ神奈備、葛木ノ鴨ノ神奈備、宇奈提ノ
神奈備、飛鳥ノ神奈備トアルヲ思フニ、何処ヲ神ノマスアタリヲハ神奈備ト云ヒテ、神辺ノ意
ナルヘシ。〈其中ニ飛鳥ノ神奈備山ノワキテ名ニ負ヘルハ、総即別名ノ意ナリ〉立向ハ、タチム
カフト読ヘシ。〈今ノ点ハ叶ハス〉三垣ノ山ノ神奈備山ニ向フナリ。秋芽子之妻卷六跡トハ、是
ハ芽子ヲ鹿ノ妻トヨメルニハ替リテ、秋芽子ノ如クメツラシキ妻ヲ卷寝ムト、云ナリ。令動ハ、
トヨメト読ヘシ。今ノ点ハ誤レリ。立ハ、タテト点セル本ニ依ルヘシ

初みもろの山なひ山に 神辺山とかきたるを、八雲御抄に、かみへの山とよませたまへり。今の本
には、かみなひ山とよめり。海辺とかきて、うなひともよみたれば、今の本をよしとすへし。神
辺山は三輪山の異名といふはいはれす。立向ふみかきの山、立むかひとあるはわろし。三垣山と
て、神なひ山にむかへる山の有なるへし。それを神なひ山は神のます山なれば、いかきにたとへ
て、名はおふせけるにこそ。

しかし、地名の研究書である『類字名所補翼鈔』などでは、次のごとくやはり萬葉集から八代集に
及んで「神名備」を詠み込む歌を列举し、とくに説明を加えるということをしていない。そのあり方
はやはり『能因歌枕』等のごとき体裁である。

類字名所補翼鈔

神名備 大和万葉歌

我門の早田もいまた刈あへぬにかねて移ふ神なひのもり
神なひの山のさは水我なれやあさましくのみ見えしわたれは
時雨のあめまなくしふれは神なひのもりのこのはも色付にけり

貫之

神無月時雨にそむる紅葉を錦におれる神なひのもり

みつね

春ふかみ枝さしひちて神なひの河へにさける山ふきの花」

読人不知

かみなひの森によをへて啼鹿は過行秋を惜とめなん

我ならぬ神なひ山のまさ〈か〉木もてつのまく鹿もねこそなきけれ

神名備

赤 人

三もろの神なひ山にいほえさししゝにおひたるとかの木の

大 伴 卿

たゝしはしゆきて見てしか神なひの淵はあさひてせにかならん

清きせに千鳥妻よふ山のはに霞たつらん神なひのさと

厚 見 王

蛙なく神なひ川にかけ見えて今やさくらん山ふきの花

神なひの神より板にする杉の思ひも過す恋のしけきに」

旅にして妻こひすらし郭公神なひ山にさよふけてなく

神なひの山下とよみ行水にかはつなくなり秋といはむとや

神なひにひもろきたてゝいむといへと人のこゝろは守りあへぬかも

神なひのうちわのさきのいはふちにこもりてのみや我こひをらん

契沖は、地名について、萬葉集の注釈書である『萬葉代匠記』では詳しく説明するが、地名研究書では萬葉の歌をはじめとして地名を詠み込む歌を列挙するかたちであった。このように鹿持雅澄より少し前の時代の研究者をも含めて、地名の研究書は、『能因歌枕』や『五代集歌枕』のごとく歌枕として歌を挙げていくという体裁・在りようであった。それに対して、鹿持雅澄は地名をどのように考証しているであろうか。

鹿持雅澄の大著『萬葉集古義』中に『萬葉集名處考』（天保九年〈1838〉～天保十二年頃）があり、更に雅澄が最後に記したとみられる『萬葉集古義』中の『萬葉集名處國分』（天保十三年〈1842〉完成）がある。『名處考』の完成から一年後に記されたものである。その凡例には、「おのれさきに、萬葉集名處考を著せり、故其書によりて、こたみ各國を分ち、又その國の中にて、各類を分て、山川海里と寄集めて、うひまなびのともがらの歌よまむたづきとすさるは、よろこびのをりにまれ、かなしみのをりにまれ、その國人に、その國の名處をよみて贈らむとするとき、名處を探りもとむるに、いと便よければなり、しかのみにあらず、おとなしききはの人も、その國人にあひたらむほど、その國の名處のあり處、さては地の形勢風景など尋見むと思ふに、ふとは思い出がたきことあるに、他國人にあはむと思ふほど、此書を懐にしたらむには、その國の名處の、彼集に出たらむかぎりをば、唯一目に見出られて、いと便やすからむ料にもとてなり」と書き記す。そしてこれより一年前に記した『萬葉集名處考』の凡例には「飛鳥に、里あり、川あり、綱兒に、浦あり山あり、さるたぐひは大綱に「あすか」「あご」と出して小目に里川浦山など類を別て歌詞を出せり、いづれもこれに准べし」というように記す。あるいは「此書は、名處を主として註せるが故に、名處にあづからぬことがらは皆はぶけり、その地の利用、あるいは形勢、或は由縁の類をくはしくしらざれば、歌詞にわたりて盡ざること往々あるをば、はやく古義に詳悉に註しおきたれば、彼註につきて考べし、さはいへど、さきに古義に考へもらせしがごときは、こたみ、此書にいひたることもまれまれあれば、中にはいさゝか彼より委しきこともありとしるべし。」とあり、『萬葉集名處國分』の「凡例」で、『萬葉集國分』を著す経緯・理由を大きく二つに分けて丁寧に分かりやすく記述する。また『萬葉集名處考』の「凡例」では『萬葉集古義』で記した地名との関わりを述べ、『名處國分』の「凡例」同様、名所を記した本書の利用のし方を述べる。

次に鹿持雅澄は、注釈書である『萬葉集古義』と地名研究としての『名處考』とをどのように関わらせて論述しているか、前述の契沖のあり方との相違というかたちで以下眺めてみたい。まずは契沖でもとり挙げている「大原」について眺めることにする。

おほはら（大原）

萬葉集古義

103 吾里爾。大雪落有。大原乃。古爾之郷爾。落卷者後。

大雪は、(ミユキとよまむは非し、) オホユキと訓る宜し、此下高市皇子尊殯宮時歌に、大雪乃乱而來礼、十九家持卿歌に、大宮能内爾毛外爾母米都良之久布礼留大雪莫踏祢乎之などあり、○大原は、統紀に、天平神護元年十月己未朔辛未、行幸紀伊国、云々、是日到大和国高市小治田宮、壬申、車駕巡歴大原長谷、臨明日香川而還と見えて、今も飛鳥の西北の方に、大原村といふありて、即藤原ともいふとなり、

志貴皇子御歌一首。

513 大原之。此市柴乃。何時鹿跡。吾念妹爾。今夜相香裳。

大原は、二巻に出て、彼処に云り、十一にも見ゆ、(現存六帖に、人をいかでおもひわすれむ大原や此いちしばのつかの間ばかり、)

2587 大原。古郷。妹置。吾稲金津。夢所見乞。

大原は、大和国高市郡にて、藤原とも云、鎌足大臣の本居なり、皇居の藤原とは別地なり、思ふべからず、二巻にも、大原のふりにし里、とあり、○夢所見乞は、いかで夢に見えよかし、と望ふなり、○歌意は、大原の故郷に妹を留め置て、独別れかへり来て、夜寝入むと思へどもひに堪かねて、打つかねば得寝入ず、いかですこし寝入て、妹が事の夢になりとも見えよし、となり、契沖、頼政卿の歌に、山しろのみづのゝ里に妹をおきていくたびよどの舟よばらむ、これは今の歌をおぼえてやよまれけむ、といへり、

『萬葉集古義』(注釈書)では、鹿持雅澄も契沖と同じく一〇三番の歌をとり挙げ、傍線部にあるように『統日本紀』を引いて、統紀に大和国高市の小治田宮がある云々と大原の地を考証し、五一三番の志貴皇子の歌でも「大原之此市柴乃何時鹿跡吾妹爾今夜相香裳」に対しての大原をこの大原は他の巻にも出ること示し、また、二五八七番も、大原は高市郡にて皇居の藤原とは別地であることを述べて混同なきよう喚起する。

このように注釈書の『萬葉集古義』で「大原」が詠まれる歌それぞれで解説するのは契沖と同じであるが、雅澄は地名研究の『萬葉集名處考』でも次のように詳しく纏めて記す。その点、契沖の地名研究の『勝地吐懐編』(三巻本)や『類字名所補翼鈔』などとその趣を異にする。

萬葉集名處考

おほはら（大原）大和国高市郡にあり、統紀に、天平神護元年十月己未朔辛未、行幸紀伊国云云、是日到大和国高市小治田宮壬申、車駕巡歴大原長谷、臨明日香川而還、と見えて、今も飛鳥の西北の方に、大原村といふあり、即藤原ともいふとなり、鎌足大臣の本居なり、皇居の藤原は異地なり、しかるを多武峰記に、藤原宮大原也、とあるは、たがへることなり、卷四に、

大原之此市柴乃何時鹿跡吾念妹爾今夜相有香裳、(この大原を、類字集に、山城とせるは非なり、)
〔頭註、大原やをしほの山とよめるは、山城乙訓郡、大野の炭竈、又臘の清水とよめる、同国愛宕郡なりと云り。〕〔古郷〕卷二に、吾里爾大雪落有大原乃古爾之郷爾落卷者後、十一に、大原古郷妹置吾稻金津夢所見乞、(是を類字集に、山城とせるは非なり、)大原は、後岡本宮の旧跡の東北三四町ばかりにあれば、旧にし郷といふよしいへり、但し此は、昔女の家に通ひ住坐しによりて、のたまへるにもあるべし、貫之の、人はいざ心もしらず故郷は、とよめるごとく、凡てむかしかよひやどりし処をば故郷と云り、

傍線を付すように、「おほはら」について、ここでも『続日本紀』を引用し、更に『類字集』を引くなどして、総合的・多角的な面から考察を加えている。次の「かむなび」も『萬葉集古義』の説明と共に、「名處考』でもまとめて一層詳しく説明をほどこしている。

かむなび (神名火 神奈備)

萬葉集古義

324 三諸乃。神名備山爾。五百枝刺。繁生有。都賀乃樹乃。弥繼嗣爾。玉葛。絶事無。在管裳。不止將通。明日香能。旧京師者。山高三。河登保志呂之。春日者。山四見容之。秋夜者。河四清之。旦雲二。多頭羽乱。夕霧丹。河津者驟。每見。哭耳所泣。古思者。

神名備山は、即神岳なり、

969 須臾。去而見牡鹿。神名火乃。淵者浅而。瀬二香成良武。

須臾は、シマシクモと訓べし、十五に、筑紫道能云々思末志久母見祢婆古非思吉云々、又於毛布恵爾云々之末思久毛伊母我目可礼弓云々、などあり、○神名火は、高市郡飛鳥のなり、○浅而は、アセニテと訓べし、(略解に、アサビテとよめれどいかゞ、) 爾は奴のかよへるなり、三卷に、久方乃天之探女之石船乃泊師高津者浅爾家留香裳、(これアセニとよむべき証なり、) こゝは浅の下に、爾か去かの字など脱しか、又然ずとも、アセニテなり、○歌意は、すべて淵は瀬にかはりゆく、世のならひなれば、故郷の神名火川の淵も、瀬に変わりあせ行て、昔のさまは、ありしにもあらぬ形になりぬらむか、暇あらば、しばしだにも、行て見たき哉となり、

1125 清湍爾。千鳥妻喚。山際爾。霞立良武。甘南備乃里。

清湍は、飛鳥河のなり、○妻喚は、ツマヨビと訓べし、(ツマヨブ、と絶てよむは、わろし、) 清き河瀬には、千鳥の妻呼声し、山際には、霞の立らむと思ひやる意なり、○甘南備乃里は、即飛鳥里なるべし、○歌意は、甘南備の里は、清き河瀬には、千鳥の妻呼声し、山際には、霞の立て、此頃はいと興まさりて、おもしろからむ、と思ひやるゝぞとなり、

1435 河津鳴。甘南備河爾。陰所見。今哉開良武。山振乃花。

甘南備河爾云々、集中に、高市郡にも、平群郡にも、神名火をよめり、此歌なるは何郡のにや、一説に、此なるは平群郡なり、とも云り、○歌意かくれたるところなし、(金葉集に、春深み神なび河に陰見えてうつろひにけり山吹花、)

2162 神名火之。山下動。去水丹。川津鳴成。秋登將云鳥屋。

神名火は、集中に、高市郡にも、平群郡にもよめり、此は何郡にや、但し山下動去水、と云るは、

神名火河にて、即八卷に河津鳴甘南備河、とよめると、同処なるべし、其は一説に、平群郡にありとも云り、○歌意は、神名火山の、とどろとどろと鳴りひゞくまで流るゝ水に、音をあはせて、しきりに蝦が鳴くなり、秋の来りしと云ことを、人に告知せむとてにや、然なくならし、となり、蝦は秋もはら鳴故に、かくよめり、

2715 神名火。打廻前乃。石淵。隱而耳八。吾恋居。

神名火は、集中に高市郡なると、平群郡なるとをよめり、此歌なるは、何の郡のなるにや。未詳ならず、但し石淵とよめるによれば、いはゆる神名火河にや、

萬葉集名處考

かむなび (神名火)(神辺)(神名備)(神南備)(甘南備)(神奈備)(甘管備)など書り、神奈備といふことは、出雲国造神賀詞に、乃大穴持命乃申給久云々、己命和魂乎、八咫鏡爾取託天、倭大物主櫛長玉命登名乎称天、大御和乃神奈備爾坐、己命乃御子阿遲須伎高彦根乃命乃御魂乎、葛木乃鴨能神奈備爾坐、事代主命能御魂乎、宇奈提乃神奈備爾坐、賀夜奈流美命能御魂乎、飛鳥乃神奈備爾坐、天皇御孫命能近守神登置天云々、と見えて、何郡とかぎりたることなし、この神奈備を、神乃毛理といふ言の、約まり通ひたるものなりといふも、一わたりはさることなれど、神社といふことは、何国にてもいへるを、神奈備といふことは、大和国にて、平群、葛城、磯城、高市などの郡々にもはらいひて、ひろく他国にもいへることなければ、たゞ神社といふとは異にて、かの神賀詞にいへる如く、皇朝の近衛神と坐す神々等の、うけはりて鎮り座す地をいふ称とおぼえたり、かくて集中にいへる神奈備は、高市郡なると、平群郡なるとをよめるはいちじるきを、其他いづくの神奈備をよめりとも、たしかに知がたきこれかれあれば、各其歌につきて用捨あるべし、」卷九に、神南備神依板爾為杉乃、念母不過恋之茂爾、十三に、霹靂之云々神南備乃清三田屋乃云々、又、葦原笑云々甘南備乃三諸山者云々、甘管備乃三諸乃神之云々、又、神名備能三諸之山丹隠蔽杉思將過哉蘿生左右、○〔山〕卷三に、三諸乃神名備山爾云々、卷九に、三諸之神辺山爾云々、卷十に、大夫丹云々故郷之神名備山爾云々、又、客爾為而妻恋為良思霍公鳥神名備山爾左夜深而鳴、十三に、独耳見者恋染神名火乃山黄葉手折来君、又、帛叫云々石走甘南備山丹云々、又、三諸之神奈備山從云々、又春去者云々、味酒乎神名火山之云々、又、里人之云々神名火之彼山辺柄云々、これらは、高市郡飛鳥の神南備にて、三諸岳これなり、即神岳と云るに同じ、」卷八に、神奈備乃伊波瀬乃杜之喚子鳥痛莫鳴吾恋益、又、神名火乃磐瀬乃杜之霍公鳥毛無乃岳爾何時来將鳴、これらは平群郡なるをいへること、磐瀬とつづけたるにてしるし、」十一に、神名火爾紐呂寸立而雖忌人心者問守不敢物、又、神名火折廻前乃石淵隱而耳八吾恋居、又、神名備能浅少竹原之美、妾思公之声之知家口、○〔山〕卷十に、神名火之山下動去水丹川津鳴成秋登將云鳥屋、○〔河〕卷八に、河津鳴甘南備河爾陰所見今哉開良武山振乃花、〔頭註、金葉集、春ふかみ神なび川にかけ見えてうつろひにけり山ぶきのはな、〕○〔淵〕卷六に、須臾去而見牡鹿神名火乃淵者浅而瀬二香成良武、○〔里〕卷七に、清湍爾千鳥妻喚山際爾霞立良武甘南備乃里、これらは、何の郡のを云りとも、定めがたし、

鹿持雅澄の地名研究を眺めてみると、上にとり挙げなかったものを含めて、次のごとき特色を挙げることができる。それを簡条書きに示してまとめたい。

一、地名を五十音図順に配列。たとえば、あきづしま〜いこまやま〜おおはら等と五十音図に沿って列記することである。現代ではごく当たり前であるが、江戸時代にあつては五十音図は音韻の図で

あり、音韻や文法の助けとなるものという形で利用・研究されていた。これを配列の順番として用いることはなかった。鹿持雅澄が最初であるかどうかということがあるが、契沖等のいろは順に比べて、格段に合理的でわかりやすいと言える。

二、近世までの地名研究者と同様、雅澄も文献からの考証であり、实地踏査によるものではない（ただし、土佐日記地理辯では同じ四国のことでもあり、实地踏査を行っている）。

三、先人の説（契沖・宣長等）を検討し、それを踏まえたり批判的に捉えたりして、妥当な考えをうち出そうとしている。大和の地名に関して言えば、契沖と宣長の考えを多くとり挙げており、宣長のものとしては、アキヅ、イコマ、ウナテノモリ、オホサカ、サキ、ハツセ、アキヅシマ、シキシマなどの地名の所に、契沖のものとしては、アキヅ、アラキダ、イケカミ、オホアラキ、カサノヤマ、サカタノハシ、ホソカハ、ミナフチなどの地名の所に認められる。その他、谷川士清もアホヤマでとり挙げている。雅澄にはこれら先人の研究を踏まえて、自身の独自の考えをうち出していくといった態度がみてとれる。

四、歌枕研究は時代を問わず広く歌に現れる地名を対象とする。対して、雅澄はあくまでも萬葉集に現れる地名を対象に考証する。

五、平安朝以降の文献に現れる地名のこともとり挙げつつ、とくに日本書紀の地名をもって傍証することが多い（大和でいえば四十六ヶ所の引用）。その他、和名抄や神名帳の引用もあり、主に上代のものが中心となっている。

六、契沖の勝地吐懐編〈三卷本〉、類字名所補翼鈔などの地名の研究書は、雅澄に比べて、歌枕をとり挙げる歌論書等——地名（名所）を詠み込んだ歌を萬葉に限らず、八代集の歌などを列挙する形式——により近い。なお、勝地吐懐編一卷本は、里村昌琢の類字名所和歌集を修正・増補した著であり、萬葉集を多くとり挙げている。

七、萬葉集のいくつかの歌で同じ地名が現れるのを萬葉集古義ではそれぞれの歌で説明を加える。対して、萬葉集名處考では、それを総合的にまとめて説明を施す。契沖の萬葉代匠記に対する勝地吐懐編、類字名所補翼鈔などと異なる態度である。

雅澄の地名考察は文献中心ではあるが、こうした雅澄の研究基盤が出来たあとに、実際に地名の場所を尋ねて踏査するといった研究へと繋がり、発展していったものと考えられる。